

小学校社会科教師の力量形成過程に関する研究

— 岡田渉教諭の場合 —

中 島 常 彦

(2014年10月2日受理)

A Study on the School Teacher's Growth of Elementary Social Studies Teaching

— A case study of Mr.Wataru Okada —

Tsunehiko Nakajima

Abstract: The purpose of this study is to clarify the outline of the elementary school teacher's growth, to examine both his lesson plans which is made by Mr.Wataru Okada, and interviews of his life-history. The result of this paper is the following three.

- 1) He was gradually growing through taking a chance to encounter the mentor teacher at his school. It is important to share time at school. He was able to make lesson plans depending on advices. He began to have positive feelings to teach social studies.
- 2) He was conscious of understanding children's learning. He able to make lesson plan connected with the student's experiences.
- 3) He gradually makes original lesson plan using theory in social studies teaching. He establishes his own teaching style and reconstructs his views of teaching as perspective transformation.

Key words: social studies, teacher education, teaching skill

キーワード：社会科教育，教師教育，授業力

1. はじめに

教育の基礎を規定する要素は教師である。学校現場において、教師はここ10年のうちに3分の1が新採教員と入れ替わるといわれている。また、このようにベテラン教員が大量退職を迎え、若手教員が増加するという現状の中で、小学校教師の30%が社会科指導に不安を感じているという報告もなされている。このような状況の中で、教師の質の高い力量の形成をどのように行っていくのかは、社会科教育においても、これまで以上に急務の今日的課題となっている。

このような課題に对应していくために、本研究では、社会科のエキスパート教員を取り上げ、彼らが高度な実践的力量をどのように自己形成してきたのかを解明することを通して、社会科教師に求められる力量形成の視点と方法を明らかにしていきたい。具体的には、個々の教員の成長のライフヒストリーから、その教師

が自己の授業課題や問題意識をどのように克服し、乗り越えてきたのかを分析することを通して、小学校社会科教師自身がどのように資質や能力を獲得していったのか、その力量形成過程を明らかにしていきたい。なぜなら、エキスパート教員自身の力量形成過程を明らかにすることで、高度で実践的指導力を備えた教員育成のプロセスがより明確になると考えられるからである。そのことは、これからの教員養成や現職教員研修の改善への示唆を与えると考えられる。

そこで、本研究では、高度な専門性と実践的指導力を兼ね備えた教員、いわゆるエキスパート教員として、岡田渉教諭(以下、岡田と略記)を取り上げる。そして、岡田の社会科授業実践を中心とした成長過程を考察するとともに、彼自身が小学校社会科教師としてどのような力量をどのように形成していったのかを、いわゆるライフヒストリーの研究手法を用いることによって明らかにしていきたい。このような手法を採用する理

由は、実践に込められた岡田の願いや用いられた教育内容や方法に込められた意図などをより具体的に読み取ることができ、彼の力量形成過程と其中での転機を解明することができるかと考えるからである。また、提供された指導案とインタビューから、岡田固有の課題や問題意識をどのように解決・克服していったのかを丁寧に読み解くことによって、教師の成長、すなわち力量形成の過程が明らかになると考えるからである。

なお、本研究においては、社会科教師の力量形成過程を貫く中核をなすものは授業力¹であり、それを「教師」「教材」「子ども」の3つの相互関連の視点から考察するものとする。「教師」の側面においては、どのような人と出会い、何をどのように学んだのか。「教材」の側面においては、単元設計力や教授—学習のスキルをどのように獲得したのか。「子ども」の側面においては、授業で子どもの何を大事に思い、何を育てようとしているのか。これらをインタビューから詳細に分析していく。なお、本稿で用いる「エキスパート教員」²とは、以下4項目の力量を備えた教員と定義しておきたい。

- ①すぐれた小学校社会科授業を構成し実践できる。
- ②独自の教材を開発し、それを使った授業展開を組織することができる。
- ③子ども一人一人の児童理解に基づいて、実態に応じた指導の工夫・改善ができる。
- ④授業理論を構築し、それに基づくより質の高い社会科授業を開発・改善できる。

2. 岡田渉教諭のライフストーリー

岡田は2000年埼玉大学教育学部卒業後、同年6月から2001年7月末まで川口市の小学校で非常勤講師を勤める。2001年10月から2002年3月末まで川崎市の小学校で非常勤講師を勤める。2002年4月に川崎市立日吉小学校に新採用として7年間勤務した後、2000年4月より横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校へ移り4年間勤務する。2013年4月には川崎市立大戸小学校へ異動となり、2014年4月からは同校で研究主任を担当している。まず、岡田のライフストーリーを仕組みや授業実践の違いに着目して時期区分を行うと、表1のようにまとめることができる。

第Ⅰ期の課題は、「教師主導の社会科授業からの脱却～子どもにどう教えるか～」(2002年～2006年)であり、岡田の社会科教師としての始動を窺うことができる。第Ⅱ期では、「教材と子どもを意識した社会科授業の構築～子どもと教材をつなぐ～」(2007年～

表1 岡田歩教諭のライフストーリー

期	年	勤務校・学年	ヒストリー	指導案
Ⅰ	2002年	日吉小学校3年	同僚との出会い	昔の道具
	2003年	5年	同僚の機嫌	パワーエッジ 資料①に対応
	2004年	6年	市社会科常任委員	
	2005年	1年	国工の全国大会	
Ⅱ	2006年	2年	組合支部役員	
	2007年	6年	外部研究会へ参加	頼朝はなぜ義経を殺したのか
Ⅲ	2008年	3年	教育課程実践発表	かしこい買い物 資料②に対応
Ⅳ	2009年	鎌倉小学校3年	同僚専門家と出会う	コンビニの仕事 かまぼこ工場
	2010年	4年	新しい授業理論模索	鎌倉美術館
	2011年	3年		鎌倉野菜 自動販売機
	2012年	6年		なんとかなずレ
	2013年	大戸小学校5年		雪と共に暮らす 資料③に対応
	2014年	6年	研究主任	富国強兵

2008年)が課題となり、子どもが主体的に社会科を学ぶようになるためにはどう教えればよいか、子どもと教材に着目し始めるようになる。そして第Ⅲ期は、「問題解決的な社会科授業の開発～自己の実践を作り上げるために～」(2009年～2014年)という課題の克服を目指して、一人一人の学びを感じ取りながら理論に基づいた授業づくりを展開することになる。

3. ライフストーリーにおける社会科授業の課題解決

(1) 第Ⅰ期 教師主導の社会科授業からの脱却

～子どもに何をどう教えるか～ (2002年～2006年)

①初任期の岡田教諭を取りまく環境

ここでは、先述した「教師」「教材」「子ども」の3側面から考察していくことにする。この時期の岡田にとっての課題は、日々の社会科授業をどう行っていくかということであり、とりわけ「教師」として毎日どう学級を経営するかということであった。初任時、岡田の学年の先輩教師は川崎市小学校社会科研究会で常任委員を務めていた教師であった。さらに校内にはもう一人川崎市社会科研究会で常任委員を務めていた教師がおり、職場では2人の社会科に精通した教師との出会いがあり、初任当時より社会科に関して恵まれた環境にあったといえる。

②授業構成要件の認識

恵まれた環境にあった岡田であるが、同僚教師の授業実践に衝撃を受けている。「どうすれば隣のクラスのように子どもが主体的に授業に参加するのか」と思い続け、以後同僚の授業スタイルを盗みたいという気持ちで同僚教師と接し、「その同僚教師の発する言葉の端々に出てくるヒントを自分なりに解釈した」そうである。当時、「その教室にはいろいろな仕掛けがあったのだろうが、当時はわからなかった」と岡田はふり返っている。さらに同僚教師からは築地久子氏の本を

薦められている。岡田は当時築地の本を読んだそうだが、「毎日同僚教師と一緒にいるだけでも授業実践や子どもの扱い方がわからないのに、本を読むだけでは何が必要なのか全く分からなかった」と述べている。以上から、授業構成要素として、発問の工夫や子ども理解、授業理論が必要だと感じ始める段階であったといえる。

③ 課題解決の到達点と新たな課題

初任1年目に岡田は、「道具から見える人々の生活の変化」³と題して授業実践を行っている。教材構成において前時に洗濯板を使った経験を生かし、洗濯板と洗濯機のどちらがいいかそれぞれのよさを挙げながら自分ならどっちに決めるか、といった授業である。洗濯板を前時に一度使った経験と、児童によっては普段全く使ったことのない洗濯機を比較しながら授業を進める構成には無理があり、教師の意図で展開していく授業だったことが読み取れる。子どもと教材である洗濯板をどのように出会わせ、学習材としての洗濯板と洗濯機を比較する学習問題にどれほどの必然性があったかは疑問が残る。しかし、岡田は学習の流れの中にゲストティーチャーを組み込むことで「子どもが心底熱心にゲストティーチャーの話を聞くということはこの実践から学び、演出の大切さを知った」としている。

翌年同僚教師を自身のモデルにし、「愛情いっぱい！パワーエッグ・モリモリたまご！」（資料1参照）と題して以下の実践に取り組んでいる。同僚の授業や日々の助言を見聞きする中で、自分も授業開発ができるのではないかという主体的な意思のもと授業作りに向かい始めている。1年目の「道具から見える人々の生活の変化」の実践と比較し、岡田の変化を8点指摘することができる。

- 1) 学習対象を人に焦点化し、茨城県と川崎市の養鶏農場へ取材に行き、単元構成を試みている。
- 2) たまごを教材として取り上げ、単元全体をたまごで貫き、授業内容の質が変化した。
- 3) 教科書の米作り単元を参考に県別鶏卵生産量や養鶏農家の1日の仕事の自作資料を作成している。
- 4) 50年間変化しないたまごの価格を用い、子どもの思考のずれを活用した学習問題を設定している。
- 5) 森さんと中村さんが販売するたまごの価格の違いに注目させ、生産者の努力や工夫に迫っている。
- 6) 生産者の情意面をとらえさせた上で、これからの日本の養鶏場を考える授業構成を行っている。
- 7) 「どうして50年もの間、たまごの値段がかわらないのだろう」という授業者が設定した学習問題を子どもから引き出すことができている。

8) 同僚に勧められ、次時の学習問題を本時の授業の最後に取り入れる築地久子氏の授業スタイルを取り入れた。

このように、未定着ではあるが、独自教材を開発することにより授業作りに必要なさまざまなスキルに気付き、教材のメーカーとしての教師に進もうとしている姿を読み取ることができる。

しかし、I期の課題として以下のことが現れてきた。「当時は授業の形を重視し、子どもが主体的に意見を言ったり、動いたりすることに憧れていた。子どもの発言を表面的に聞くだけで、発言内容より見栄を求めたいようである。子ども一人ひとりを見てその子に合った声かけをするのではなく、子どもの動的な現象ばかり見、自分自身が前のめりになり全く子どもを見ていなかった」としている。2年目も子ども一人ひとりを見る余裕はなく、子どもとの距離を感じるようになる。そんな状況で子どもが育つはずがないと自身をふり返り、子ども理解について悩み始めるようになる。

岡田の転機は4年目に担任をした1年生の子どもたちと接する中で訪れることになる。「1年生の児童は自分の気持ちに偽りがなく、ありのままの気持ちで教師や仲間と接している。一人ひとりによさがあることに気付き、子どもの何を大切にできるかが見えてきたのが4年目だ」と岡田はふり返っている。一方で、同僚の教師にはやはりよく思われたい気持ちは常にどこかにあったとも述べている。岡田にとっては4年目の1年生担任と5年目の2年生担任を経験することにより、一人ひとりの子どもを大切にしたり、一人ひとりに声かけをしたり、子どもを学習の主体にしたりすることなどを自身の課題としてその後の実践に取り組むようになっていく。

(2) 第Ⅱ期 教材と子どもを意識した社会科授業の構築～子どもと教材をつなぐ～（2007年～2008年）

① 子ども理解に向けて

教師生活も6年目を迎え、2007年、2回目の6年生担任を迎える。第Ⅱ期の岡田の課題（問題）は、「子ども」である。表面的形式的に子どもが活動したり動いたりすることから一歩推し進め、子どもの本質や子どもの本音に迫ろうと試み始める。まず2007年より岡田は、社会科一教科ではなく、全ての教科や教育活動全体を通して自分の意見を発言する子どもを育て始める。みんなで学習していることに意味があることを具現化するために、一人ひとりが自分の考えをもち、学級のみんなに伝えることができたという満足感や充実感を子どもたち一人ひとり実感させようとしている。6月の国語の実践からは、児童は教師の発問に発言は

するものの、表面的かつ断片的で、発言内容に深まりはほとんど見られない。岡田の目指す子ども同士の意見の交流には程遠い。しかし、岡田は誰もが安心して話せる雰囲気クラス作りを心がけようとしている。相手意識や仲間意識を強調し、お互いに語り合い、聴き合う集団作りが一人ひとりを生かすことにつながると感じ始め、他の教科でも意識的に取り組もうとしている。I期では、子どもが意見を言うことが善で、ただ子どもが発言さえしていればいいと考えていたが、国語科の指導案にも「話をつなげるように投げかける」と記している。子どもを育てるには時間がかかるのであるが、教師側にそういう意識や意図がないと子どもが話したり聞き合ったりするクラスにはならない。この段階で岡田は上記の意識のもと、授業を進めていることが窺える。つまり授業を実践していく上で、子どもの発言が授業に不可欠な要素だと認識し始めたのである。

② 子どもと教材を結ぶ努力

7月に「頼朝はなぜ義経を殺した」⁴という実践を行っている。政治の中心が鎌倉に変わった理由を考えるために、児童を鎌倉に連れて行きフィールドワークを行っている。さらに、単元の学習過程が、第一次で武士とはどんな人たちなのかを考え、第二次で政治の中心が京都から鎌倉に変わった理由を考え、第三次で武士と幕府の関係を考え、元との戦いに勝った幕府が衰える理由について考える展開になっている。本時では、協力関係にあった頼朝と義経が次第に対立していったのはなぜかを追求することで、頼朝が武士の世の中を作ろうとしたことを児童が相互に考えを深め、生き方まで考える過程とし組織されている。児童にとって考える必然性があり、追求できる学習問題を設定しようと努力し始めている。授業記録からも、「付け足しで」といって発言内容に広がり出したり、調べた根拠を明らかにする児童も出てきたりしている。さらに、「だけど」や「〇〇さんが言った」とか、「今の話を聞いて思ったことなんですけど」、「ちょっとまって。それはない」等子どもたちは相手を意識しながらお互いに語り合っている。さらに反対意見がしっかり述べられるようになってきている。クラスに誰もが安心して話せる雰囲気を岡田と子どもたちとで作上げた証拠である。

7年目には「かしこい買い物をしよう」(資料2参照)を3年生で実践している。4時間目「スーパーに行く人がなぜ多いのか」を終え、岡田は次のように記している。「この時間初めて、一人一人が生きる学習らしいものに近づいた。自分の考えを持ち、それを仲間へ発信することで自分以外の見方・考え方に触れること

ができる。高め合っているところまで行っていないが、友達と学ぶよさ実感したのではないかと思う」としている。子どもの意見を一部抜粋すると、「他の人の意見を聞いてなるほどと思ったのも、あれっと思ったのもありました」「友だちの意見を聞いたらなるほどと思いました。みんなの意見をあわせてたくさん意見が出るんだなあと思いました。友達の意見を聞いたら思いついたりもしました。スーパーの多い理由は予想だからほとんどわからないけど、どれも本当ほいです」「いろいろな意見をきいて、どれがあっているか、スーパーではたらいっている人に聞いてみて、わたしが思ったことがあっているといいなと思いました」など、岡田が求めていた子どもの意見を大切にした社会科授業の構築を実現し始めている。これらを可能にしたのは、教師の発問である。

本単元においては、方法を絞る発問、見方を広げる発問、自分の判断を迫る発問という形で発問の質も変わり、時機に応じた発問を意識するようになってきたことが挙げられる。さらに教材も独自に開発し、10時間目には「どうしてお肉しか売っていないのに、お客さんがたくさんくるのだろうか」と学習課題を設定している。お肉しか売ってないのに、スーパー同様繁盛しているお店の工夫や努力をつかませようとしている。

③ 課題解決の到達点と新たな課題

この時期から岡田は、自身で単元計画づくりに挑戦したり、教材研究に基づいた課題設定や授業の終わりに次時の学習問題を設定したりしている。それは2003年に出会った同僚や築地久子氏の授業スタイルを取り入れたからである。当時の同僚は2005年から大学院へ進み、岡田は川崎市の社会科研究会で学びながら自分で授業スタイルを模索する段階に入っている。この時期の岡田の新たな課題としては、以下の2点を指摘することができる。

第1に、一人ひとりが自分の考えを持ち、クラスに伝えることの満足感や充実感を持てるようになるためには、教師としての具体的な指導がさらに必要なことである。そのために一人ひとりのとらえを明確にし、その子のよさを認識しながら、その子どものよさを集積しながら、教材として取り上げる事象を自分の生活との関わりで考えられるように教師が助言できるというような資質の獲得である。第2に、問題解決的な学習を展開するにあたり、学習問題が自分のもの、クラスのものになるようにしていかなければならないことである。個人の疑問から学習問題に発展していくには、みんなで話し合っていく価値のあるものかどうか、子どもが学びとれるような仕組み、つまり子どもの思考を次の活動へつなげていくような授業設計や、単元を

構成する力が必要となってきたこと。以上2点が、この時期における岡田の到達点であり新たな課題であったと指摘できる。「教師」「教材」の両側面で力量を高めつつも、同時に「子ども」をさらにどう育てるかという課題も継続して続いている。

(3) 第Ⅲ期 問題解決的な社会科授業の開発

～自己の理論と実践を作り上げるために～ (2009年～2014年)

①新たな社会科授業との出会い

教職8年目を迎え、岡田は横浜国立大学附属鎌倉小学校へ赴任することになる。附属鎌倉小学校で展開されていた社会科授業を目の当たりにして、岡田は「自分が7年間実践してきたことが否定され、今までの自分が間違いだった」と語っている。1年目に会った同僚の足立氏が岡田にとって魅力的であり、氏が子どもと一緒に授業を作っていることに魅かされている。岡田にとっては教職2年目3年目に会った同僚に次いで、2年目のメンター的な出会いであったと言える。彼女の一例を取り上げることにしよう。4年生の「事故の防止」単元において、足立氏は鎌倉の警察はどんな格好をしているだろうと問い、児童から出た服装を確かめるために警察へ見学に行くところから始まるのである。岡田が昨年手ごたえを感じ始めていた子どもの疑問からスタートする授業に出会うことになるのである。

②新たな社会科理論を自分のものに

しかし、昨年まで実施してきた指導方法を一夜にして変更するのは難しいものである。附属小学校では、今まで岡田が資料と呼んでいた紙ベースの物は資料ではなく、経験を資料として授業実践を行うスタイルであった。岡田が現在まで行ってきた授業中に資料を出すことは、子どもを引っ張ることになるのでタブーであった。目標に迫るための資料という考えはなく、附属の方針とはかみ合わず悩む日々が続いた。岡田は、指導教員で3年目のメンターになる横浜国立大学教授の重松克也氏の助言を、自分で納得しながら一つ一つ取り入れている。公立小学校では、内容ありきの社会科授業を実践していたが、附属小学校では子どもが今何を考えているのか、子どもの思考を読み取りながらどこに向かっているのか、ゴールを設定するような「教材」、つまり子どもがわからないことを内容に据えたテーマを選びながら授業実践をしなければならなかったのである。岡田は、絶えず授業を再構成する資質を備えた「教師」に成長できるかという問題に直面していったわけである。公立小学校での経験に加え、「教師」「教材」「子ども」の3つの側面に新たな力量の広がり

見せ始める。岡田はどう力量を形成していったのか見ていくことにしよう。

まず、附属1年目の2009年には「かまほこ工場」⁵の実践を行っている。今までと違うのは、「単元を通して子どもに願う姿」を座席表にし、一人一人の子どもの実態を踏まえ、どう育てて欲しいのかという記述が現れてきている。さらに、附属2年目に実践した「美術館から見える社会」では、単元を通して子どもに願う姿として「自分が今まで調べてきたこと、考えていること、今までの生活から遭遇してきたことを土台として思いを話す。また様々な見方をする人がいることを知り、これから自分たちができることを考えていく姿」という表記が見受けられる。一人ひとりが生きる学習を実践するためには、子ども自身が成長した、やり遂げた、友達から学んだという実感をもつことが必要である。そのために教師が児童個々の現状を把握し、単元を通して子どもへ願いをもつことが大切ではないかという立ち位置で授業をするように変化してきている。このことは2006年頃から岡田に芽生え始めた表面的な子ども理解で満足するのではなく、一人ひとりの子どもを大切に、一人ひとりの子どもがどう考えているのか、どのような思いで授業に参加しているのかということを読み取ろうと具現化されていると考えられる。

また、教材を深く研究する中で、岡田は「川崎市で経験した社会科指導は内容や題材ありきの授業である。教科書に載っていることはいずれ子どもが大きくなるとわかることである」と考え始め、「社会科の授業ではもっと現実社会とかかわれる子どもを育てたい。もっと社会と関われる社会科の授業を目指したい」と至るまでになってくる。現在の社会科は内容が綿密に用意されているが、教科書や授業の中で終わっている社会科で現実とのかかわりが弱いとの認識に立ち始める。指導教員に影響を受けながら、岡田は子ども時代に社会とかかわったり、子どもが社会に違和感を感じ、社会に問題意識を持ったりする授業を模索し始める。

③理論構築を踏まえた社会科授業の開発

そこで岡田は、2010年に「美術館の閉館から見る社会」⁶の教材開発を行っているので詳しく見てみることにしよう。

岡田は子どもにとって身近な存在である県立美術館を1次で取り上げている。子どもは図工の授業で近代美術館を活用したり、2年生の時に年間美術館へ通い続けたりしたクラス。3、4年生時に、図の授業の一環として美術館でワークショップを行ったり、鑑賞したりした経験。そんな身近な美術館がなくなるという

一つの事実を扱うことによって子どもたちに学ぶ必然性が生じるという確信から岡田は単元計画を進めている。第1次では、学芸員として働く方々、八幡宮の方々、観光客の人、附属小学校の他のクラスの子どもなど。美術館が閉鎖することにより影響を受ける人々を設定している。第2次から第10次にかけては、市役所の方々、アーティストなど美術館を様々な立場から見ている人と出会いながらそれぞれの立場の意見を聞いている。第11次以降は、町の人にアンケートを取り学芸に渡したり、家族に美術館がなくなる話を持ちかけたりしている。そこから町の人の美術館に対する思いを考え、市民を巻き込んだ学習が進展している。学習の追求により、第17次からは美術館を存続させるために児童は社会に参加・参画して解決を目指そうとしている。岡田自身美術館の閉鎖を止めることを市民と一緒に考えることを通して、社会の考え方の厳しさに触れることを一義的に考え、閉鎖阻止が目的ではないとしている。

岡田は子どもが主体的に考えるものが社会科だと考えて授業を実践してきた。子どもが主体的に考えるために、子どもが調べたい、考えたいと思う学習問題を作らねばならないが、そのために教師が資料を用意し、その資料から子どもに問題意識を持たせ学習問題にしてきた。教師はねらいに達成した時点で満足するが、社会科が現実の社会に結びつくべきものなのに子どもにとってはどこか遠い世界の出来事であり、授業という枠の中だけの違和感をもっていった。現実社会に子どもが関わりを持ってないとの意識から、「鎌倉美術館」の授業を構成している。子どもと方向性を決めながら、問題解決の理論や社会参加の理論を取り入れながら、自分なりの授業を構築し始めている。そこには深い自分なりの問題意識が窺われる。子どもが社会に働きかけることによって現実社会から跳ね返ってくる厳しさへの抵抗感が子どもたちをさらに本気にさせるとの考えに岡田は至ったのである。

2013年岡田は川崎市立大戸小学校へ異動する。1年目5年生を担任し、「雪とともにくらす～日本一の豪雪の町津南町にすむ人々の暮らし」（資料3参照）の実践を行っている。単元設定の理由として、「社会科というものが資料の中で知識として完結してしまうことが懸念される。大人も子どもも社会の一員として生活しているのであるから、社会的事象を自分事としてとらえなおしたとき、自己内対話が生まれ、自分のこれまでの生き方を問い直していくのではないか」としている。この問題意識に立ち、日本一の豪雪地帯の津南町を取り上げ、雪から身を守る工夫としての克雪を学んでいる。この雪を有効に利用して産業や町づくり

に生かしながら生活している逆転の発想として利雪の部分を生近な人参を用いて教材化を試みている。以下その特色を5点指摘する。

第1の特色は、教材構成において、雪の降る生活では雪から身を守るための工夫だけでなく、雪と調和した暮らしで雪を有効に利用して産業や町づくりに利雪が役立っていることを、知識ではなく、自分たちの住んでいる場所になじみに気付かせていることである。豪雪の理由や条件の知識だけでなく、特産物が生まれる理由や条件の原因を説明することが学習内容になっている。

第2の特色は、学習内容を習得させるための教材として利雪を具現化させるため恩田さんが行っている「冬のにんじん作り」が取り上げられていることである。冬に雪を有効に利用した農業や町づくりの事例として取り上げられている。

第3の特色は、発問と資料である。豪雪地帯の津南町の生活を読み解くために、「津南の人々はどうやって生活しているのか」という問いを出し、4mの棒を持って校庭を歩きまわって豪雪を可視化させるなど、子どもの素朴な疑問から出発している。第2次では、「雪の多い津南町ではどのような工夫をしているのだろう」という問いと、川崎と津南町の家を比較しながら消雪パイプや縦型信号機、道だけ除雪した町の写真や取材を通して自作した津南町役場の除雪作業の一日の資料や町役場の人の話を用意している。さらに、「にんじんの出荷量は少ないのに、なんで津南のにんじんが特産品なのか」という問いと恩田さんと農家の宮崎産の雪下ににんじんの資料が用意されている。第3次では、「雪があるいいことは他にもないだろうか」と問い、雪室という冷蔵庫や雪の発電、恩田さんの話の資料が用意されている。

第4の特色は、単元の学習過程が、第1次で津南町の人々がどうやって生活しているのかを考え単元を貫く問題意識をもたすことを、指導案に明記するようになったことである。第2次で、雪の多い津南町の人々の生活や産業の工夫を考え、第3次は学習したことをもとに単元を貫く問題意識を深める過程として組織されている。

第5の特色としては、このような授業構成の背後に問題解決学習の授業理論があることである。子どもにとって身近なにんじんを扱いながら、資料から学習問題を設定している。これは教師になってから一貫している。学習指導要領の目標を達成するためには、限られた時間の中で学習問題の質を上げようとする努力が窺われる。

岡田実践を見てみると、2年目に会った同僚の授

業に影響を受けたことを起点に、強い子ども理解とそれを踏まえた細かい支援を生かした授業作りを大切にしてきたことがわかる。教師が単元を構想しながらも、子どもの学びの過程に生じるずれを常にすり合わせ修正している。つまり問題解決学習の学習過程を踏まえながら、授業は教師と子どもの共同作業であるという自らの問題解決学習授業理論を構築している。

なお、現在は、校内において研究主任という立場で若手教員を牽引している。しかし、課題も出てきている。それは、自身の実践をどのように若手教員に伝え、実践の参考にしてもらうかである。一般的に自身の実践を次年度の教員に実践をしてもらう場合、引き継ぎが難しい。今後岡田は同僚とのコミュニケーションを深めながら、校内の同僚と共に社会科授業研究を実践していくことが求められる。一方で、常に謙虚な姿勢で課題を乗り越え学び続けている。

4. エキスパート教員としての力量形成過程

以上みてきたように、岡田は、各時期に直面した課題を克服しつつも新たに表出してくる課題と向かい合いながら、力量を自己形成している。それぞれの時期における岡田の獲得した力量と見えてきた課題をまとめると、表2の通りである。

第Ⅰ期は、教師としての駆け出しの時期である。この時期には、日々の授業づくりや学級経営で精一杯の時期であるが、同僚教師との出会いにより、自分にとって目指すモデル像が明確になる。このメンターとしての同僚から、社会科授業としての教材開発の方法や資料作成、学習問題の作り方を聞きながら、模倣している。教師主導であった1年目の授業から2年目には教材や発問の質が変化したことが読み取れる。

このように、Ⅰ期において授業の型を身に付け始めるが、模索する日々が続く。さらに、同僚のように子どもを中心に据えた授業づくりを実践することが実現せずに、悩み続ける日々を過ごす。しかし、低学年の担任を契機に、子どもの素直さや子どものよさを学び、子ども理解が授業作りの中核になるのではという問題意識を持つことになる。

第Ⅱ期は、校内での授業づくりに邁進する一方、校外の川崎市社会科研究部の教員をメンターにしながら教師としての成長の道を歩む時期である。この時期には、Ⅰ期で獲得した教材開発の手法を生かしながら新たな単元開発に取り組む。1時間で完結する授業ではなく、2時間連続の社会科授業を目指し始める。それはメンターの勧めで始めた築地久子氏の学習問題の設

表2 各時期における獲得した力量と見えてきた課題

		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
教師	獲得	・モデルとしてのメンターとの出会い ・築地久子氏の書籍との出会い	・川崎市社会科研究部でのメンターとの出会い	・新たなメンターとの出会い(大学教授・同僚)
	課題	・日々の授業づくり、学級経営	・自力で教師像を模索	・川崎市の同僚とうまくやっていく力
教材	獲得	・教材開発の手法 ・取材の仕方 ・資料作成の仕方 ・学習問題の仕方 ・ゲストティーチャーの活用と演出	・教材開発の手法を生かした新たな単元開発 ・1時間で完結しない授業への挑戦 ・内容や題のありきの授業に疑問をもち始める ・本時中に次時の学習問題を作る授業スタイルの確立 ・フィールドワークを取り入れた単元構成 ・築地久子氏の理論	・単元を貫くカリキュラム開発 ・単元を貫く学習問題作り ・社会に発信したり参画したりできる単元を開発する力 ・社会と子どもをつなぐ単元開発力 ・築地久子氏の理論
	課題	教師主導の授業づくり	・子どもの思考を生かした授業づくり	・川崎市の社会科研究部を切り拓いていく力
子ども	獲得		・子どもに教える社会科授業づくり ・子どもを鍛える力	・子どもを丁寧に見とめる力 ・子どもの思考の変容に気づく力 ・単元を通して願う子どもの姿をイメージできる
	課題	・子どもを生かすきれない授業づくり	・子どもとともに学ぶ社会科授業づくり	・子どもの思考を的確に判断する力 ・子どもの思考を取り入れながら授業をデザインする力
課題をどう乗り越えたか		・メンターの模倣や同僚と日々の会話から ・低学年の子どものふれ合いから子どもを学ぶ	・些細なことを受け止め、子どもが止まる学級作り ・全ての教科で子どもの発言を大切に ・研究会での助言を生かした日々の授業づくり	・授業を通してどう子どもを変容させていくか ・単元を貫く学習課題をどう設定するか ・絶えず学び続け自己を高める姿勢

定の方法に依拠している。さらにフィールドワークを取り入れながら、子どもと教材をつなぐ工夫も見られ始める。

第Ⅲ期は、子どもの思考を大切にしながら、さらに子ども一人一人の思考を的確に判断しながら、子どもの変容を願う授業作りに取り組む。問題解決学習をベースにしながらも学習する子どもの側の事象を意識しながら、子どもと教師の共同作業で授業を作る力量を形成している。そして、授業と社会が結びつくように子どもたちが主体的に探究していく実践に取り組み始めている。

上述した岡田の力量形成過程を整理すれば、図1のようにまとめることができる。彼のライフヒストリーは3期に区分されるが、各時期において彼自身が身に付けた実践的力量を上段に、課題として浮かび上がってきたものを壁として下段に示している。時期ごとに獲得する力量が違うことがわかる。彼自身が高度な実践的力量を自己形成していくようになっていくために必要なことをまとめると、以下の3点を指摘することができる。

第1に、岡田教諭は自己のモデルとなる教師との出会いを重ねながら、社会科教師として必要な力量を身に付けてきたということがいえる。つまり先輩教師の

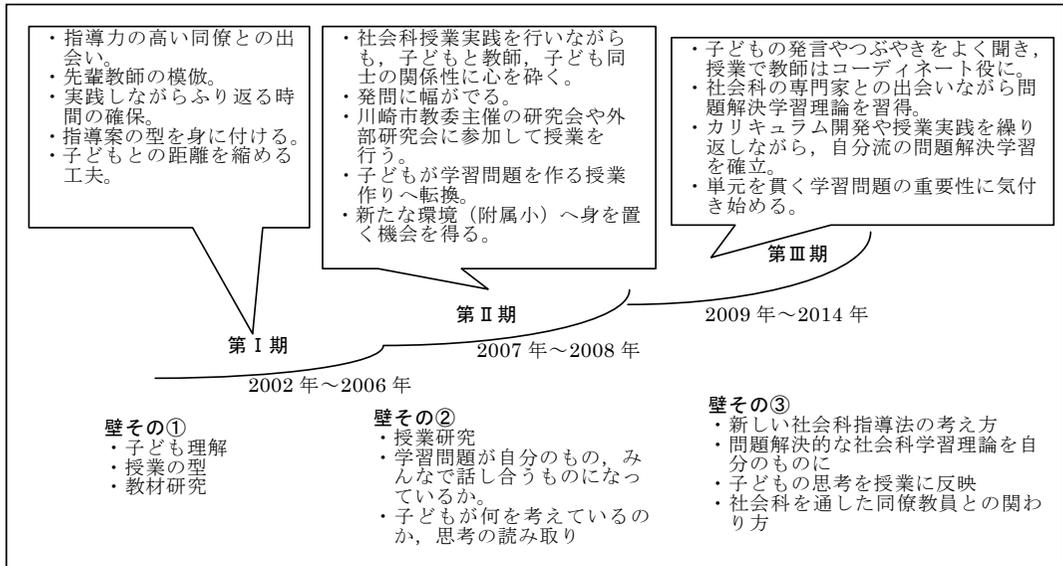


図1 岡田教諭の力量形成の足跡

模倣に始まり、授業設計における教師の役割としての教材開発の方法や指導案の書き方や授業の型を身に付けていったといえよう。さらに社会科の専門家との出会いにより、今までとは違った社会科学習理論に遭遇する。悩みながらも理論を一つ一つ自分のものにし、自分流の問題解決な社会科授業論を構築するようになる。

第2に、カリキュラムや教材のユーザーとしての教師から、次第に教材やカリキュラムを自分で作るメーカーとしての教師へと変化していることである。教材ありきの社会科学習から脱却し、独自教材の開発を通して子どもに学習問題の作り方を学ばせている。そこから子どもに学ぶ必然性や当事者意識を持たせることを通して問題解決を行う授業へと変化している。問題解決の授業を実施するにあたり、子どもと社会を結ぶ教材や単元を貫く学習問題の質と向き合うことが重要であることを示している。

第3に、岡田教諭の事例から授業における児童理解が不可欠なことである。モデルとなる教師から最初に学んだことは児童実態に基づきながら授業設計をし、指導過程を工夫することであった。岡田は独自教材の開発と共に学級の児童を鍛えている。子ども一人ひとりが安心して発言できる学級の雰囲気作りや子ども一人一人を見取りながら、子どもの発言に寄り添いながら意見を出したり聴き合うことの面白さや他の楽しさを感じたり、子どもの試行をつないだり読み解いたりしながら、授業を通して子どもの変容を願う教師へと変化している。

5. おわりに

本研究では、小学校社会科エキスパート教員の力量形成過程について、岡田渉教諭のライフヒストリーを事例に考察を行ってきた。岡田の例からも読み取れるように、一人の教師が高度な実践的力量を自己形成していく上で、モデルとしてのメンターの存在は大きいといえる。メンターとの関わりをフィルターとして、自己の授業に必要な要素に気付いている。また、実践を通して自分の授業をふり返ったり、改善したり、開発したりする中で、自己の授業をメタ認知する力を形成していることがわかる。

そのことは、最初に述べたエキスパート教員として必要な力量として挙げた4つの指標の順を追って、より高度な実践的力量を自己形成している過程ととらえることもできる。さらに、その中に深い子ども理解がなければ、教師や教材との相互関連の深まりもないと考えられる。

今後はエキスパート教員の事例研究を増やしながら、小学校社会科エキスパート教員の力量形成過程の一般化を図っていきたい。

【註】

1 森分は、教師が自己の社会科授業「理論」を深め、自己の主体的責任において授業を構成できるようにならなければ、教師の専門性は確立していかないと述べている。森分孝治『現代社会科授業理論』明治

小学校社会科教師の力量形成過程に関する研究

— 岡田渉教諭の場合 —

図書, 1984, p21。

2 本研究で定義するエキスパート教員については、文部科学省の力量ある教員（確かな指導理論と優れた実践力・応用力）、広島大学大学院教育学研究科高度化プログラムより高度な実践的指導力を備えた教員、鳴門教育大学大学院が提唱する3つの力（教育実践力、自己教育力、教職協働力）、兵庫教育大学大学院教育研究科教職実践専攻の「キャリアに応じたワンランク上を学び続ける」などを参考にしている。

3 岡田渉「道具から見える人々の生活の変化」の実践

指導案, 2003.1。

4 岡田渉「一所懸命に…いざ鎌倉！」（第2回川崎市小学校教育課程研究会社会科に実践報告された指導案, 2008.8。

5 岡田渉「かまぼこ作りにはげむ人々」（横浜国立大学附属鎌倉小学校第3回教育UPセミナー社会科学習指導案）, 2009.1。

6 岡田渉「美術館の閉館からみえる社会」（横浜国立大学附属鎌倉小学校第4回教育UPセミナー社会科学習指導案）, 2010.1。

（主任指導教員 小原友行）

【資料1】岡田渉「愛情いっぱい！パワーエッグ～畜産にはげむ人々～」（第1回川崎市立小学校教育課程研究会 社会科授業研究会指導案, 2003より）

- 日時 平成15年6月16日（月）5校時
- 単元名 「愛情いっぱい！パワーエッグ・モリモリたまご」～畜産にはげむ人々～
- 単元目標 我が国の畜産について、茨城県の中村牧場と川崎県の母口の森養鶏場でのたまご作りの様子を中心に、農業が国民の食生活を支えていることや、農業に従事している人々の工夫や努力を調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、自然環境と深いかわりをもって営まれていることをかかえるようにする。
- 単元構想と評価（11時間扱）

単元構想	支援と具体の評価基準
<p>①たまごをどのくらい食べているのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 毎日たべるよ。・1週間に3個くらいかな。・ほとんど食べない →たまごはどんな所でたくさん作られているのかな。 ・鹿児島県が日本一。・神奈川県は少ないよ。・茨城や千葉も多いよ。 →何か理由はあるのだろうか。 ②③④⑤どうして茨城県がたまご作りがさかんなのだろう。 →何か理由がありそうか。・パワーエッグ →何か工夫していることはあるかな。 ・一日のしごと ・えさ ・にわとりの育て方 ・その他 ・輸送 ・その他 →こんなに工夫しているからさかんに作られるんだね。 ・50年間のインスタントラーメンの値段・50年間のたまごの値段・今よりずっと安いね ・ほとんどかわらないよ。 →どうしてかな。何か理由があるのかな。 ⑥どうして50年もの間たまごの値段がかわらないのだろうか。（本時） ⑦どうして森さんは一つのたまごを30～50円で売っているのだろうか。 ・おいしいたまごを作るのにお金がかかるから。・数が少ないので、買う人も少ないから高く売らなきゃいけない。 ⑧⑨森養鶏場を調べてみよう。 ・水は裏から湧き出る湧水を使っているよ。・鶏は3000羽で赤いたまごを産むよ。・えさは他の養鶏場よりも工夫しているよ。 ・取れたて卵を自分の家で直接売っている。・近くに民家があるので、においや音に気が使ったりしているよ。 →中村さんの養鶏場とは違うところが多いね。 ⑩中村さんと森さんはどんな気持ちでたまご作りをしているのだろうか。 中村さん ・多くの美味しいたまごを作ろうとしている。・たくさん作れるように工夫している。 ・自分の養鶏場に誇りをもっている。 森さん ・川崎市にはあまり養鶏場がないので誇りに思っている。・場所が狭くにわとりの数が少ない分、愛情をこめて世話をしている。 →どちらも愛情と自分の仕事に誇りを持っているんだね ⑪これからの養鶏場はどうなるのだろうか。 ・これからもおいしいたまご作りに励んでくれる。・外国からの輸入品がふえてくるのでは。 	<ul style="list-style-type: none"> ○たまごを実際に食べてみることで、たまごに対する興味・関心を高める。 ○グラフが読めない子に対しては、数字よりも何が一番で、何を表したグラフなのかを押しさるように助言する。 ○「さかん」ということはどんな理由や工夫があるのか投げかける。 （関）たまご作りのさかんな理由について、資料集やインターネット等の資料や聞き取りをもとに進んで調べている。 （技）資料などを活用して、たまご作りのさかんな理由について調べている。 ○大都市近く、トラックで輸送しやすい場所にある頃に気づくように促す。 ○調査活動では、なぜ茨城県がたまご作りが盛んなのか考えるように投げかける。 （思）茨城県のたまご作りがさかんな理由を調べ、えさの工夫、土地条件、運輸、消費者の需要等と関連付けている。 （知）国民の食生活を支える重要な役割を果たしていることがわかっていく。 ○子どもにとって身近なものであるインスタントラーメンの物価が上がっているのを取り上げるようにする。 ○なかなか考えられない子に対しては、たまごの生産量の違いから、価格の違いを考えていくように助言する。 （知）消費者の需要に応じて、生産量や価格を決めていることがわかっていく。 ○中村さんの養鶏場との違いを考えながら調べたり、考えたりするようにする。 （技）中村さん、森さんとの違いを比較しながら調べた過程や結果を目的に応じた方法で表現している。 （思）たまご作りをしている人たちの思いや願いに対して、自分なりの考えをもっている。 ○仕事の工夫、中村さんと森さんの話を思い出し、自分がたまご作りをしている気持ちで考えるように投げかける。 （知）たまご作りにはげむ人々は生産を高めるためにえさの輸入や出荷の工夫をしたり、施設を整えたりするなど努力していることがわかっていく。 ・ノート・発言内容 （思）今まで学習したことと関連付けながら自分なりに養鶏場がどうなっていくのか考えをもっている。・ノート・発言内容
5. 本時の目標	50年もの間たまごの値段が変わらない理由を養鶏場の人々の努力と結びつけて考えることができるようにする。
6. 本時の展開（6/11）	

学習活動	予想される子ども들의意欲	支援と具体の評価基準
<p>1. 前時の確認をする。</p> <p>2. 本時の学習問題について話し合う。</p> <p>3. 次の学習問題を定める。</p>	<p>40年前のインスタントラーメンの値段</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今と全違う。・今よりも安い。 50年前のたまごの値段表 ・ほとんど同じ。・50年前とほとんど変わらない。 「どうして50年もの間、たまごの値段が変わらないのだろう。」 ・技術が進歩したから。・昔より多く作ることができる。・前に学習したように、工夫していることがたくさんある。 ・鶏小屋の設備がよくなった。・栄養のあるえさのおかげで多く作られるようになった ・たまごを食べる人が増えたから安く売ることができる。 ・養鶏場の人々の努力 ・高速道路などができて早く新鮮に運ぶことができるから →色々な努力をしているから値段が50年間も同じだね。 森養鶏場の写真・たまごの値段 ・たまごの色が違うね。・中村さんの養鶏場とは違う養鶏場かな。・川崎市にも養鶏場があるんだ。 ・1個30～50円するんだ。・どうしてだろう。 →中村さんのたまごより高いね。 どうして森さんは卵の値段を1個30～50円で売っているのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもにとって身近なもので物価が上がったものを取り上げ、たまごの値段と比較するように促す。 ○50年間ほとんど物価が上がっていないことを取り上げ、なぜたまごの値段が変わらないのかを考えるように促す。 ○なかなか考えられない子に対しては、今まで調べ学習してきた養鶏場の工夫を思い出させるように促す。 ○自分が意見が持てない子に対しては友達の見聞きながらノートのメモするように助言する。 ○友達の見聞き質問したり、反対意見を言ったりすることで、それぞれの思考が深まっていくように投げかける。 <p>【思考・判断】</p> <p>50年間、たまごの値段が変わらない理由を養鶏場で働く人たちの工夫と努力によるものだという点と関連付けている。・ノート・発言内容</p> <p>○川崎市にも養鶏場があるということを知らせ、調べる意欲をもつように投げかける。</p>

【資料2】岡田渉「かしこい買い物をしよう～見直そうわたしたちのくらし～」（校内研修社会科授業研究会指導案、2008 年 7 月）

第3学年3組社会科学習指導案

1. 日時 平成20年6月23日（月）3校時

2. 単元名 「かしこい買い物をしよう」～見直そう わたしたちのくらし～

3. 単元目標 ・地域にある店に関心をもち、そこへ働く人や店内の様子について調べる活動を通して、販売の特色や、他地域とのかわりについて理解し、店で働く人の工夫や努力を考えようとする。
・小売店、スーパー、コンビニのそれぞれのよさを理解し、自分が買い物をするときに自分なりの工夫をして買い物しようとする。

学習活動と予想される子どもの反応	支援と具体的評価基準
①どこでどんな買い物をしているのだろうか。 ・スーパーで買った。マルエツに行くよ。コンビニでお菓子を。おばあちゃんは村店で野菜を。 ②買い物をしよう。 ・何を調べようかな。調べることをみんなで考えよう。○店の名前 ○交通手段 ○種類 ○買ったもの ○買い物が工夫したこと ○買った人 ・1週間調べてみよう ③みんなの家はどこでどんな買い物をしているだろう。 ・週に一度大きな店買いのをしてよ。マルエツで週2、3回は買い物をしているよ。急なときは、コンビニで買ったもの。 方法を教る発問：「どうしたらわかりやすくなるかな」 ・表やグラフにするとわかりやすいのではないかな。 →スーパーマーケットが一番多いね ・どうしてかな。 ・なにかひみつはあるのかな。 ④どうしてスーパーで買い物をする人が多いのだろう。 ・たくさん売っているから。 ・ふだん食べるものが多いからかな。 ・何か工夫しているのかな。 ⑤⑥⑦スーパーにお客さんがいっぱいいるひみつを見つけて行こう。（計画1時間・見学2時間） どこを、何を調べてよかな。 ・店長さんへどんなことをインタビューしようかな。 ・品物が見やすく置いている。 ・車いすも考えてあった。 ・セール品がたくさんあった。 ・外国の商品もあった。 ⑧⑨スーパー（マルエツ）の見つけたひみつを言い合おう。（品物）・（サービス）・（買いやすさ）・（安さ）・（新鮮さ）・（パントリー） 肉屋・魚屋 買い物の棒グラフ 見方を広げる発問：「つちやさんのように小さなお店はお客を集める工夫はしていないのかな」 ・そんなことはないよ。ねだんを安くしているのでは。 ・昔からずっと好きで買っている人もいるんじゃないかな。 ⑩つちやさんはお客を集めるためにどんな工夫をしているのだろうか。 ・スーパーより新鮮なお肉を用意している。 ・肉の種類がたくさんある。 ・サービスマンがわかるように安心して買えるようにしている。 つちやさんに聞いてみたいね。 ・こだわっているところ。スーパーにはないところ。 ・日本各地の様々なところから仕入れしている。 スーパーも小さい店もそれぞれいい所があるんだね。 自分の判断を迫る発問：「みんなが買い物をするとき、どんなことに気をつけて買い物をしますか。」 ⑪かしこい買い物をしよう。 ・品物が売られる場所を知っておいた方がいいよ。 ・野菜が新鮮かどうか・品物のねだん、安くはないわかってほしい。 ・品物の量、ねだんに作った人の名前があると安心する。 ・リサイクルボックスを使うようにしたい。 一これら買い物をする時に生かしていきたいね。	○「遠足のおや」はどこで買ったのか」と投げかける。 【問】普段の生活を思い出しながら進んで買い物に行った時のことを発言している。 ○家で買った物の様子がわかるように調べるのがらや、調べる方法を確かめるようにする。 ○左の項目から4つ決定する。 ○1週間くらい調査期間をとり次時に進める。 【問】進んで買い物調べをして結果を表に表そうとしている。 ○調べた結果を話し合い、結果をグラフにして視覚にうつえるようにする。 ○算数「表とグラフ」の学習と関連 【注】調べたことをわかりやすくグラフに表している。（ノート） 【思】結果がなぜスーパーが多いのかを考え、目的に応じて買い物をする場所を選んでいくことに気付いている。（ノート、発言内容） ○見学に行く前に何をみるのかという視点を明確にしたせるようにする。例えば「売り場の品物の並べ方」など 【注】店は品物の並べ方や価格、新鮮さ、お客さんへのサービスなど様々な販売の工夫をし、自分たちの生活と関わっていることを観察したり、聞き取りをしたりして調査し、具体的に調べている。（インタビュー・ノート） 【問】お店で働く人の仕事を通して働く人について進んで調べている。（見学の様子） 【注】調べたことをわかりく店内地図に表している。（カード、地図作りの様子） ○予想をする。スーパーと比較して考えるように投げかける。 ○事前につちやさんにお話をしておく。 ○他地域とのつながりにも目を向けられるようにする。 ○今までの学習のまとめである。売り手側の工夫から買い手側の工夫といった視点を転換をはかるようにする。 【思】スーパーと八百屋、コンビニのそれぞれのよさを考え、自分で買い物をときにそれとみに適切に判断している。（発言内容・ノート） 【知】それぞれの店では、お客さんを集めるための工夫や努力をすることがわかり、販売を通して自分たちの住む町は他地域の地域と結びついていることを理解している。（自作テスト・まとめの感想）
【資料3】岡田渉「雪とともにくらし～日本一豪雪の町津南にすむ人々のくらし」（川崎市立小学校教育課程研究会授業研究会指導案集、2013 年 7 月）	
第3学年2組社会科学習指導案	
1. 日時 平成25年6月19日（水）5校時	
2. 単元名 「雪とともにくらし～日本一の豪雪の町津南に住む人々～」	
3. 単元目標 ・自然条件から見て特色ある地域の人々の生活について関心をもち、新潟県津南町の人のくらしについて調べ、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関係があることが考えられるようにする。	
4. 単元の流れと評価（6時間扱い）	
単元構想	支援と具体的評価基準
①豪雪地帯である津南町の人のくらしをどうやって生活しているのだろうか。 ・津南町の雨風図 ・津南は気温が高い・夏と冬の温度差があるね。 ・冬は降水量が多いね。 冬の積雪量の可視化（4m） ・学校の1階が雪で埋まっちゃうよ。 ・こんなに雪が降るんだ。 ・雪かきが大変だ →自分の家と津南町に住んでいる人々のくらしをどうやって生活しているのかな （単元を貫く問題意識） ②川崎の家と津南の家の違いを比べ、津南の家の作りか工夫している人々のくらしを考える。 夏の写真と冬の写真 ・雪かきが大変だ →津南で生きている人たちはどうやって生活しているのだろうか 津南の家 ・玄関が階にある。屋根が斜めに、雪が落ちないようにしているんだね。古い家は雪下ろしをしないといけない。 思田さんのくらし 津南町の雨風図 ・冬は降水量が多い。川崎を比べて降水量がらう。冬は川崎よりも気温が低い。夏は川崎と同じくらいの雪かきだね。 →津南町に住んでいる人々は、雪かきを守るために家の作りが私たちが住んでいるマンションや家とはずいぶん違う ③雪が多い津南町ではどのような工夫をしているのだろうか。 消雪パイプ 縦型信号機 道だけ除雪された町 ・車で通れる雪をどけている。 ・どうやってたくさん雪をどけるのかな。 ・水を流すと雪が解けるんだね。 ・このあたりの信号機は縦型なのに、縦の方が雪が積もらないかも 津南町役場の除雪作業の一日 ・朝2時から雪解けをしているんだ 津南町役場の人の話 →津南に住む人たちは除雪作業を数回した家の作りを工夫したりして雪からうまく身を守っているんだね。 ④にんじんの出荷量は少ないのに、なんで津南のにんじんが特産品なのか（本時） ⑤雪があるといいことは他にないだろうか ・雪にちなんだ昔からの行事があるよ。 ・雪を都市に持って行き交流している。 ・雪祭りみたいなイベントもあるよ。 ・雪をためて冷房のように使っている。 ・雪室というのがあって、冷蔵庫みたいになっている。 ・雪は大切な所もあるけど、雪をいりる場面が利用したり、都市との交流が生まれたりするんだ 津南に住んでいる思田さんの話 ・子どもの時津南に住みたくなかったんだ。 ・自然がいっぱいであらうよ。 ・自分の家には野菜を作っているんだね。 ・津南の四季はすてきだね。津南のことが大好きなんだね ⑥学習したことをもとに新聞を作ろう 冬に雪がたくさんふる津南町に住んでいる人々は、どうやって生活しているのかな 【単元を貫く問題意識（共通の課題）】 雪を克服している観点から 雪を利用しての観点から 津南町で暮らす人々の自分の生活との比較 学習前と学習後の変容	○自分の住む川崎市での生活経験や前単元川上科での学習を自分の言葉で話す時間を大切にしたい。 ○津南町の町を紹介し、地図帳で場所を確認する ○4mのぼうを切って校庭を歩き、より実感を持たせようとする。 ○子どもと資料を疑問を抱いていきたい。 【問】豪雪地帯である津南町に住んでいる人々の生活について、どのような生活をしているのかに関心をもち調べようとする。（ノート・発言・授業外） ○積雪量の多さが実感できるように、夏と冬の間同じ場所の写真を提示し、積雪量のすこさを実感する ○「住」の視点を家の作りが焦点化する ○自分たちの地域の家と作りのちがいがいについて考えるようにする ○探検者が取材してきた思田さんを紹介する ○状況によって雨風図のデータから冬の降水量や気温を読み取り、家の作りと関連させたい。 ○自分たちが住んでいるところと比較して考えるようにしたい。 【思】津南町の人々の生活について、どうやって雪と共に生活しているのかを資料や生活経験を関連づけて考え、適切に表現している。（ノート・発言・次時までの調査活動） ○自分なりに考えたことをノートに書く時間を取る ○それぞれの写真について順に話し合い、その後3つの工夫について話をする。 ○雪に対する「もの」の工夫から、「人」の営みへと視点を広げる資料を提示する。 【知】津南町の人々は、気候条件、地形条件に適切にその条件に知恵を使いながら自然や地域の人々ともに暮らしていることがわかる。（発言・ノート） ○資料集や生活体験から根拠をもってクラスに伝えることを大切にしたい 【注】津南町の自然条件から見て人々の生活について、地図やその他の資料を活用して必要情報を集め、読み取りまとめたりして。（発言・ノート授業外での調査活動） ○思田さんのメッセージを紹介して自分たちの生活と比べるきっかけを作る ○学習を通して、学習前自分が変容した点をまとめるようにする。 ○誰に伝えるのか、何のために伝えるのかといった相手意識、目的意識が明確になるようにしていきたい。 【知】津南町の人々は、気候条件に適切に、努力や工夫をしながら人々とともにくらしることがわかる。
5. 本時の目標 津南町の人々が雪を利用してにんじんの特産品としていることを資料から関連づけて考える。（思考・判断・表現）	
6. 本時の展開	
学習活動	支援と具体的評価基準
1. 資料を読み取る 2. 学習問題を考える 3. 資料をもとに考えを出し合う。 4. まとめ 5. 次時に向けて方向づけをする	にんじんの出荷量 津南町の特産品 ・新潟県は1位かな ・にんじんが特産品なんだ にんじんの出荷量は少ないのに、なんで津南のにんじんが特産品なのか にんじんの豆知識：にんじんの収穫の様子 ・雪がないとおいしいにんじんにならない。 ・雪を利用して雪の下で育てる。 ・収穫時期をずらし出荷す。 ・雪のお陰で甘さが増すよ にんじん農家の方のくらし ・雪が降らないと困るんだ 雪を利用しての観点から ・雪祭りとかイベントもやっているのよ。 ・スキー場も雪がないと困るよ。 ・まだまだありそうだから調べてみる。
	○特産品=出荷量も多いという既成概念を覆すことから問題を作りたい ○雪を利用して農業をしている方からの話を聞くことで、作っている人々に焦点を当てるようにする。 【思】つなちゃんさんのきょうについて、雪を利用してにんじん作りを特産品としていることを資料や生活経験から関連づけて考え、適切に表現している。（発言・ノート） ○時時までに自分なりに調べて来た子を価値づけた